

この夏、東北を旅行しました。青春 18 きっぷ片手に風光明媚な土地を巡る中でも、一番印象に残ったのは、車窓から見た八郎潟の景色でした。大潟富士を背に、まだ青く固い稲穂が茫洋と広がり、風に揺れて輝くその風景を見て、疲れた心の平穏を取り戻しました。

似たような風景を見て育ってきたからかもしれません。私は京都と奈良の県境で育ちました。家の近所には、昔から受け継がれてきた田んぼが広がっていました。稲穂が風に揺れ、夕日を浴びて金色に輝く光景は、私の原風景です。

皆さんにとって、故郷の風景はどんなものですか？ 東京育ちで灰色のコンクリが原風景だと言う人もいるかもしれません。それでも、四季折々に異なった繊細な自然の情景を見たことがないという人はいないでしょう。

きっと、田んぼの風景を見てホッとするのは、私だけではないはず。連綿と受け継がれてきた稲作と田んぼの風景は、私たち日本人の心の故郷なのです。だからこそ、日本は「瑞穂国」、瑞々しい稲穂の国と称されたのです。

実際、日本の耕地面積のうち半分は田んぼ。コメを作り続けなければ、そんな風景は消えてしまうこととなります。想像してみてください、日本から田んぼがすべて消え、荒れ果てた土と雑草だけになった自然を……。

日本の稲作は今、窮地に陥っています。コメ農家が高齢化し、後継者がいないのです。

日本のコメ農家の数は 116 万世帯。そのうち 7 割が 65 歳以上で、今後 20 年で引退するか亡くなるかです。それなのに、毎年新たに農業に参入する人々のうち、稲作に従事しようとする人の割合はたったの 8% にすぎません。この割合のままだと、20 年後にはコメ農家は 15 万世帯にまで減ってしまい、コメの生産量は現在の 13% にまで落ち込んでしまうのです。いくら補助金を投入しても、それを担ってくれる人材がいなければ、稲作という営みは、簡単に失われてしまいます。このままでは稲作自体が続かなくなってしまう。

本弁論の目的は、古くから続いてきた日本の農業、稲作の営みを守っていくために、その後継者不足を解決することにあります。

従事者の将来的な不足は、稲作のみならず日本農業全体の問題です。ですが、コメ産業は特に深刻で、新規参入者の 8% しか従事しようとしません。

その原因は、稲作が農業の中でも圧倒的に利益率が低く、儲からない産業であることです。利益率の低さは、生産コストの高さと売上げの低さの 2 点に分けて説明できます。

まず、生産コストの高さについて。狭い土地では生産限界は限られているのに、機械化したことで維持費やリース料がかさんでいます。その結果、日本のコメ農家は例えばアメリカと比べると 5 倍もの赤字を出しています。コメで生計を立てている専業農家の平均年収はたったの 292 万円。これでは生活のため補助金に頼らざるを得ません。実際、日本政府が農業に対して交付している補助金の 9 割近くが稲作に対してのものです。

次に、売上げの低さについて。今日の市場のコメの単価は 20 年前に比べ圧倒的に下がりに、いくら売っても利益が出ないという状況に陥っています。ニーズが低いにもかかわらず

供給過剰になっているというのがその原因です。コメの消費量は年々減っており、20年前と比べると2割も減少しています。政府の生産調整の結果、収穫量を増やして生産効率を上げようとしても、規制に引っかかって最大限生産できず、コストだけが嵩んでいく。この規制は2018年から緩和される予定ですが、かといって最大限生産しても需要が頭打ちなので、利益は見込めません。

こうした状況から、稲作は儲からない産業とされています。わざわざ生活できない産業に参入するのは皆さんだって嫌でしょう。

となると、コメ産業の後継者を増やすには、産業構造を改革する必要があります。具体的には、先ほど挙げた生産コストのカットと新たな需要の創出が必要です。

まず1点目、生産コストのカットについて。

現在の稲作にコストがかかるのは、農業機械のレンタルもしくは維持費、肥料や苗の購入費等、削ることのできない費用が嵩んでいるからです。とはいえこれらの費用が嵩むのは、日本の農家が基本的に零細農家であるためでもあります。小麦粉を近所のSEIYUで200g買うより、業務用スーパーで5kgまとめ買いした方が安いでしょう。個々に少量ずつ購入するよりも、大量に一括購入した方が安くなるのです。経営の効率化とはこういうことを言います。現在ある農地をできるだけ大規模に一括管理して経営する存在が必要です。

ところが、今のままの構造ではそれが困難です。

日本のコメ農家の7割は兼業農家です。彼らの持つ農地はそれぞれ小さいため効率的な経営がしにくいという難点があります。つまり、ある程度大規模な農業経営を行うには、兼業農家の土地をなるべく一括管理する必要があります。

また、当然、広い農地を管理して経営するには、年がら年中農地の面倒を見られる人でなければなりません。それができるのは、コメを作ることで生計を立てている専業農家だけです。しかし、今の日本ではそうした専業農家はコメ農家全体の3割にすぎません。つまり、専業農家の割合を増やさねば、そうした大規模経営は不可能なのです。

まとめると、農地の大規模一括管理、専業農家の割合増がコストカットには必要です。

次に2点目の新たな需要の創出について。日本のコメのほとんどは主食用です。ですが、皆さんの中にも今朝パンを食べた人がいるでしょう。……あ、徹夜明けで何も食べてないという指導側の皆さん、お疲れ様です。日本人の食生活は大きく変わり、パン食の需要が高まったため、主食としてのコメの需要は頭打ちになりました。これは個人の嗜好ですから変えようがありません。主食以外のコメの使い道の中でも、近年着目されているのが家畜の飼料です。畜産農家は、従来使用してきたトウモロコシは輸入費の高騰にあえいでいます。政府はコメ飼料の推進のため補助金交付などを行っていますが、零細農家にとってコメ飼料は全く利益がないため、あまり普及していません。

これらを踏まえ、3点の政策を提案します。1点目は農協の株式会社化、2点目は、飼料

米生産の推進、3点目は、農業大学校の増設と農協との提携です。1点目は農業経営の効率化による利益率の向上、2点目は新たなコメの需要の開拓、3点目は、後継者不足の解消が目的です。

1点目は、全国700に散らばっている各農協を統括する農協を、国が筆頭株主となる形で株式会社化します。株式会社化された農協は、専業農家や新規参入者を社員とし、兼業農家の土地を買い集めます。株式会社化によって、原料の一括での大量調達が可能となるので、肥料や苗などの削減できないコストを下げることができます。また農業機械や人的資源も効率的に運用することができます。これによって、各農地の生産コストは3分の2にカットすることができます。

2点目、家畜の飼料用のコメを生産します。これは、コメの需要を増やすための政策で、1点目の政策で筆頭株主となった国が推進していきます。現在の飼料用のコメ生産は零細農家の小さな土地で行っているため利益が出ません。ですが、会社として飼料米を生産する方針であれば、大きな土地を確保することは容易です。家畜の飼料としては1kgあたり60円のトウモロコシが中心に流通していますが、飼料用米を大量生産すれば、1kgあたり40円で売ることができます。そうなれば市場において十分競争でき、コメの新たな需要が生まれるのです。

これらの政策で、農協の社員となったコメ農家の年収は計算上428万円にまで増えるのです。しかし、いくら収益を改善しても、若者がコメ農家にならなければ後継者問題は解決しません。

そこで3点目の政策として農業大学校の増設と農協との提携を行います。農業大学校とは、高卒レベルの人を対象に、講義と実習を組み合わせた実践的な農業研修教育を行っている新たな形の農業者の研修教育施設です。現在40道府県が設置していますが、多くは1クラス20人とあまりにも少人数です。この学校を増設し、さらに農協株式会社との提携を進め、ここで育った人材が農協の社員となることを促します。こうすることによって、後継者を確保することができるのです。

「豊葦原千五百秋瑞穂国」。これは日本書紀に書かれた日本の美称です。葦が豊かに生い茂り、永遠に秋になれば瑞々しい稲穂が実る国。それが日本でした。

それから千年以上たった今、「田んぼは儲からない。」と言われ、存続の危機にあります。しかし私は思うのです。稲作という歴史も、やり方次第で現代と共存していくことが可能なのではないかと。そして稲作のある美しい原風景を守っていくことができるのではないかと。

米農家の在り方を変え、時代にあった利益の上がる形にする。こうした変化を通じて、私たちの生まれ故郷である瑞穂国を、明日へと受け継いでいこうではありませんか！

ご清聴ありがとうございました。